

豊饒な日本の里山を残そう

里草会顧問 福井正樹

もう無くなってしまいう里山の生活環境を、思い出せるうちに書き留めておこうという気持ちで書き始めた。最初はそんなに続ける気はなかったが、あれもこれもと思い出してくる。昨日のことも忘れてしまっているのに、70年前のことが次々に思い出されるので楽しくなった。60回も続いたので、この段階で一区切りにすることにした。

人間の脳の記憶は深い壺のようなもので、はじめのうちはいくらでも溜めこんでいるが、そのうち一杯になってきて入れてもあふれてこぼれてしまうのだという。しかし同級生などに聞いても、私の方がよく覚えている。これは私が4歳になったばかりの1944年末に、母の実家である但馬の山奥の祖父母の家に疎開したことが影響しているようだ。大阪の西成区役所の前に住んでいたが、激しい空襲で嫌な感じのサイレンが鳴り響き、消防車が駆け回り私は防空壕の中でじっとしていなければならない。子供のままごとでさえ男の子がメガホンで空襲警報発令と叫んでまわり、私はお母さん役の子供に連れられて防空壕に見立てた墓室に連れて行ってもらう役割だ。

ところが但馬は深い雪の中で、ネズミが騒がなければ囲炉裏の火を囲んで、音も無くゆったりと一日が暮れてゆく。喧噪の街と穏やかな田舎の暮らしの差が、幼い私には強烈に記憶として残っている。次に兄弟も両親もいない大人ばかりの中で、何をしても自分の心に刻み込まれてゆくような生活だった。子供同士の騒ぎの記憶ならそのうち消えてしまうのに、疎外されて大人の中にいると妙に記憶に残っている。子供は成長してゆく過程で、本能的に大人たちの日常環境を学んで順応しようとするのだろう。

次に中学卒業と同時に高校の寮に入り、それまでの生活から切り離されてしまった。同じ環境に居て時代が経過してゆくと古い記憶は上書きされて消えてゆくのだが、私の場合はその部分が子供時代としてポツカリと残存している。さらに最近気づいたのだが、職場を離れてから家の周りの畑で子供の時と同じように野菜を育て果物を採り花や小鳥や虫を見て過ごしている。干し柿を作ろうとすると、毎日家族総出で串柿を作りおびたしい皮を剥いたこと、その皮を干して冬にはおやつとしても食べ、牛も切藁に混ぜてもらって喜んで食べていたことなどを思い出す。

学校から帰ると虫取りをさせられたが、今も大根や白菜に付く虫を取らざるを得ない。当時は名前を知らなかったカブラハバチやダイコンサルハムシは、今も全く同じように食害している。掃除機を持ち出したり塵取りに振り落としたりして虫取りの工夫を試みた。しかし子供の時にやっていた空き缶に粘土をいれトロトロに混ぜて、それを割りばしに塗り付けその粘土に虫をくっつける方法が最も効果がある。すぐ地面に転げ落ちる2ミリのサルハムシを、土から指でつまもうとしてもうまく捕れないが粘土では点として虫のみを捉えられる。

昔と同じようにエンドウを採りキュウリやナスをもぎ、ネギを摘んできて刻んで薬味に

する。気がつけば子供の頃と同じような生活をしている。毎日過酷な職場にいて社会の中で悪戦苦闘していたころの記憶は過去のものとなり、幼いころもこんなのんびりした環境で何の悩みも無く過ごしていたころが思い出されてくる。

しかしこのエッセイと並行して、敗戦後人口の大半が暮らし食糧生産の中心として繁栄した村から、現在の過疎化し衰退してゆく農山村に至る経過で、何が間違っただのかを突き止めようとして文章を書いてきた。都市は焼き尽くされ工場は破壊されて、棲む家も食うものも職場もなくその日生きるのが精いっぱい、闇市や浮浪者や犯罪にあふれた悲惨な環境だった。

しかし農村では寄生し収奪していた地主が完全に追放され土地は平等に配分し、虐げられていた小作人が自作農になって生産意欲は高まった。戦争に取られていた男たちが戻ってきて農作業に励み、芋や柿でも作物を収穫すれば買出しに来た人たちが争って買って行った。衣食住を自給し、労働人口の過半が村に居て日本経済を支えていた。作物だけではなく牛や鶏がいて、里山のすべては刈り取られ落ち葉も集めて土壌に還元されていた。薪や柴を燃料として自給し炭を供出し、蚕から糸を紡ぎ山の木を材木として出荷した。

外貨が無くて外国から何も買えない日本で、長年の悲願であった米を敗戦後わずか20年で自給を達成した。世界でも一番といえる平等と民主主義の社会を築いたのは、この農村の努力なのだ。三種の神器とたたえた洗濯機や冷蔵庫など家電製品を購入し、金の卵ともてはやされた若い労働力を供給し、高度経済成長を達成したのも農村の力なのだ。

しかるに都市資本と貨幣経済は村に工場を建てて労働力を吸収し、高米価政策で農民票を得ようと金をばらまき、3Cと称した車やエアコンを農村に売り込み、高い農機具を普及させて、農村の生産現場を疲弊させた。重厚長大と言われた造船や車を輸出し、家電製品やトランジスタや半導体製品を輸出してその見返りに農畜産物を輸入した。工業製品を売るためには何か買わなければならない。肉や小麦や材木など戦後の国民を支えた農産物を自由化し輸入した。農村に労働力がなくなると工場を賃金の安い発展途上国に移した。

農山村は民族の苗代として、都市に支障がある時は被災した人々を受け入れ、養って支えてきた。応仁の乱の時も、関東大震災の時も敗戦の時も、人々はひとまず故郷の村や親族の家に依存して苦しい時をしのいだ。都市の繁栄は虚栄にすぎず、山里の村は日本列島に人が住みはじめて以来常に実存してきたのである。四季があり年間の雨量は豊饒な大地に作物を育て、自然は人々の心を癒し豊かな叙情をはぐくんできた。

私達は里山の種の多様性を維持しようと努力し、過酷な暑さや寒さの時も管理観察して山野草の生態を学び活動してきた。その意義は評価されているものの手を緩めればたちまち原野に戻り荒廃することは目に見えている。里山環境は本来は山村の生産活動の結果として自然に生まれ維持されてきたものであった。野山に働く人々の溢れていた時代はもう思い出の中にしか残っていない。

私の文章は長くなりやすいので、2ページになるように毎回纏めてきた。書きたりないことも多く残したが、ここまでお読みいただけて感謝です。

